

徂徠集・序類
訳注稿
(四)

岡本光生
澤井啓一

徂徠集・序類 訳注稿(四)

岡本光生
澤井啓一

凡例

一、今回は、次の四點を取上げた。

送魯子歸海西序 卷之十／享保二年・一七二七

紫微字樣敍 卷之九／享保四年・一七一九

贈子和之三河掌書記序 卷之十／同前

歸鞍吟草敍 卷之八／享保五年・一七二〇

なお、舊事本紀解序(卷之八／享保四年)は、西田

太一郎氏による訓讀があり(日本思想大系 36『荻生

徂徠』所收)、今回は割愛した。

送魯子歸海西序

初吾黨士相謂浮屠之文素賁、無當於五色矣。(1) 西冥(4)
魯子、獨奮然自言、段使瞿曇當其世、險葱嶺以東、
世所傳修多羅、豈盡出於詩書下哉。迺其辭下比晉
宋、譯者之臯也。知言哉。(6) 居亡何、魯子文益進、盖
五色難可名云。吾聞之瞿曇之道、無假乎辭。
無假乎辭者、無執乎辭、而什辨所傳、奉以為
經、益降而咄喝唳、靡靡卑矣。為亡害也。殊不
知為亡害者、為有益者已。(9) 故執與無執、其間
不能以寸、則道猶辭也、辭猶道也。寂莫獨守其

玄、小乘哉。要之與⁽¹³⁾其見聲聞身、瓔珞莊嚴、福相殊矣。⁽¹⁵⁾魯子亦耻爲⁽¹⁶⁾什犇徒也。故魯子之所⁽¹⁷⁾修、雖⁽¹⁸⁾親稟⁽¹⁹⁾瞿曇、而左莊筆受可也。故自⁽²⁰⁾有⁽²¹⁾浮屠⁽²²⁾以來、未⁽²³⁾有⁽²⁴⁾魯子也。物子曰、東漢迺有⁽²⁵⁾瞿曇氏之儒⁽²⁶⁾哉。古之時、王侯理⁽²⁷⁾邦、卿士共⁽²⁸⁾其職、農工商賈、各有⁽²⁹⁾所⁽³⁰⁾事、事⁽³¹⁾而五穀不⁽³²⁾分、四體不⁽³³⁾勸、佔畢修⁽³⁴⁾於辭⁽³⁵⁾者、管⁽³⁶⁾·晏⁽³⁷⁾·老⁽³⁸⁾·列⁽³⁹⁾、何適而非⁽⁴⁰⁾儒、尙能擇⁽⁴¹⁾於瞿曇氏乎。故牽⁽⁴²⁾於同⁽⁴³⁾者、謂⁽⁴⁴⁾堯⁽⁴⁵⁾·舜⁽⁴⁶⁾儒。見⁽⁴⁷⁾於異⁽⁴⁸⁾者、洙泗之間、斷斷如⁽⁴⁹⁾。豈足⁽⁵⁰⁾以知⁽⁵¹⁾大同⁽⁵²⁾之世⁽⁵³⁾邪。是其恆言矣。夫仲尼不⁽⁵⁴⁾與⁽⁵⁵⁾、我不⁽⁵⁶⁾幸而爲⁽⁵⁷⁾儒。瞿曇之道、踰⁽⁵⁸⁾葱嶺、魯子幸而爲⁽⁵⁹⁾儒。況今海內立⁽⁶⁰⁾不朽⁽⁶¹⁾之業⁽⁶²⁾者幾人邪。魯子信能儒哉。予又學⁽⁶³⁾華音於魯子。是吾黨所⁽⁶⁴⁾以有⁽⁶⁵⁾魯子⁽⁶⁶⁾焉。是歲夏、魯子將⁽⁶⁷⁾西歸⁽⁶⁸⁾、而吾黨士多⁽⁶⁹⁾贈⁽⁷⁰⁾以言者⁽⁷¹⁾。嗟乎魯子可⁽⁷²⁾以行⁽⁷³⁾乎哉。吾則有⁽⁷⁴⁾猶龍⁽⁷⁵⁾之嘆⁽⁷⁶⁾乎哉。

〔語注〕

(1) 論語·公冶長入吾黨之小子狂簡。 (2) 易·賁入白賁无咎。 (3) 禮記·學記入水無當於五色、五色

弗得、不章。 (4) 莊子·逍遙遊入北冥有魚、……南冥者、天池也。 (5) (歐陽脩) 王彥章畫像記入獨公奮然自必。 (6) 莊子·知北遊入狂屈聞之、以黃帝爲知言。 (7) 漢書·翟方進傳入居亡何。 (8) 書·畢命入商俗靡靡、利口惟賢。 (9) 書·旅獒入不作無益害有益、功乃成。 (10) 孟子·離婁下入賢不肖之相去、其間不能以寸。 (11) 楚辭·遠遊入野寂寞以無人。 (12) 揚雄解嘲入默然獨守吾太玄。 (13) 論語·八佾入與其媚於奧、寧媚於竈。 (14) 阿彌陀經入功德莊嚴。 (15) 義楚六帖入福相殊異。 (16) 佛祖統紀入翻梵音成華言。 (17) 孟子·公孫丑上入自有生民以來、未有孔子也。 (18) 左傳·昭公四年入小國共職。 (19) 韓非子內儲說上入吾知吏之不事事。 (20) 史記·曹相國世家入卿大夫已下、吏及賓客、見參不事事、皆欲有言。 (21) 禮記·微子入四體不勤、五穀不分。 (22) 禮記·

學記ハ呻其佔畢。(22)易・乾・文言ハ修辭立其誠、所以居業也。(23)史記・魯世家ハ甚矣魯道之衰也、洙泗之間、斷斷如也。(24)禮記・禮運ハ是謂大同。(25)孟子・離婁上ハ人有恆言。(26)孟子・滕文公下ハ聖王不作。(27)孟子・梁惠王上ハ海內之地、方千里者九。(28)左傳・襄公二四年ハ太上有立德、其次有立功、其次有立言。雖久不廢、此之謂不朽。(魏文帝)典論論文ハ文章經國之大業、不朽之盛事。(29)詩・匪風ハ誰將西歸、懷之好音。(30)荀子・非相ハ故贈人以言、重於金石珠玉、孔子家語・子路初見ハ贈女以車、贈女以言乎。(31)史記・老子列傳ハ至於龍、吾不能知其乘風雲而上天、吾今日見老子、其猶龍哉。

魯子の海西に帰るを送るの序⁽¹⁾

わが仲間が、「釈迦の文章は、飾り気がなく、色彩に乏しい」と言っていたが、遙か西方の人、魯子⁽²⁾が、ひとり奮然として発言するには「もし、瞿曇(釈迦)

がその在世中に、葱嶺(パミール高原)を越え、東のかた中国に来ていたら、現在伝わる経典(の文章)が、どうしてことごとく詩経・書経の後に世に出現するということがあるか。その『辞』(文章)が下って六朝時代の晋・宋の文章に並べられるというのは、「晋・宋の言葉で訳してしまった」訳者の責任なのだ」と。

なるほど、そのとうりなのだ。
 ほどなく、魯子の文章はますます進歩し、その華やかさは、おそらく五色のどのの一つだと限定するのが難しいほどになったという。

私は「瞿曇の道は『辞』(文章)に頼らない」と聞いている。「辞」(文章)に頼らないとすれば、「辞」(文章)に与からないのだが、しかし、鳩摩羅什や玄奘の伝えたものを経典として奉り、さらに時代が降ると怒鳴ったり叫んだりするかのようにな経を読む風はしだいに衰えていった。こうした傾向を「害はない」として、いるが、実は「無害」なことは、かえって「有益」なのだ。ゆえに文章に与からない立場が、文章に与かる

立場とほとんど相違がなくなるとすれば、そのときには「瞿曇の」道はあたかも「辞」（文章）によって表され、「辞」（文章）があたかも「瞿曇の」道を表すのだ。ひっそりとただ自己の内面を守っているのは、小乗の立場というものだ。ようするに、そのままの姿であるよりは、むしろ珠玉の飾りをした荘厳な姿のほうがよいのだ。福德の姿が殊なるのだ。

魯子もまた、鳩摩羅什、玄奘の徒となることを恥とした。だから魯子の修めた内容は、瞿曇に親しく受けたものであるが、左伝、莊子の文体も巧みなのだ。ゆえに釈迦以来まだ魯子のごときものはいないのである。

物子は言う。

《東漢には瞿曇氏の「儒」がいたのだ。古代において、王侯は邦を治め、卿士はその職分を共にし、農工商賈はそれぞれになすべき仕事を持った。そして五穀の生産を分担せず、四体を疲れさせず、書物を読み、言葉を修めるものは、管子・晏子・老子・列子、いず

れへおもむいても「儒」であり、さらに瞿曇氏を選ぶこともできるのだ。だから、同一性に注目するものは、「管子・晏子・老子・列子、さらに瞿曇氏もまた」堯舜の「儒」であると言い、差異性を強調するものは、孔子の教えを奉ずるものの間でも齒を剥き出しにし、いがみあう。これでは、大同の世界を充分に理解したと言えないであろう。》

これは、物子のいつも言っている言葉だ。

そもそも、仲尼が興らなければ、私には「儒」となるという僥倖はなかったのだ。瞿曇の道が慈嶺を越えたから、魯子は幸いにして「儒」となれたのだ。ましてや、今日、海内に文章という不朽の業を立てたものは、何人いるであろうか。魯子は、まことに「儒」であるのだ。

私は、また中国語を魯子に学んでいる。これこそ魯子がわが仲間たちの一員たる所以なのだ。今年の夏、魯子はまさに西へ帰ろうとしている。そしてわが仲間には送別の言を贈ろうとするものが多くいる。ああ、

魯子よ、行くがよい。(しかし) 私には、魯子の学問の奥深いところまで、いまだなお知りえていないという嘆きがあるのだ。

〔訳注〕

(1) 平野金華「金華稿刪」四「送大潮上人序」によれば、魯子の西帰は享保二(一七一七)年のことである。したがって本稿の作成年代は、享保二年と推定される。なお「東野遺稿」中に「送大潮上人序」、「南郭文集初編卷六」に「送大潮師序」がある。

紫薇字様序

初余之釋褐吾藩也、廣澤藤公謹、業已以先進擢顯列、從負弩卒、歲時校武、儼然爲爪牙藩邸中焉。然尙且以下舊所嫻習、在文學、時復與余輩、橫經鳴玉、出入乎閫闔、得近日月末光、沐口上恩、拜文綺白金之賜、以比侍從清切之臣者數載矣。則每倚席以退、相共聯翩官道上、願語弗已。或奉口

(2) 魯子。延宝六(一六七八)年から明和五(一七六八)年。黄葉宗の僧、詩人としても著名。道号は大潮、法諱に元皓。月枝、魯寮の別号がある。肥前松浦の人。十五歳にして出家、上野玄貞(国思靖)に学んで華語を能くす。正徳二(一七一一)年、江戸に出、享保二年に帰省。この間徂徠及びその門下と交遊した。著書に「松浦詩集」、「魯寮文集」などがある。

(岡本)

上旨。督諸中貴人學、若來視邸史曹事、亦皆接武遜翅、告以前政。義等同寮焉、則曹事稍間、過飲拒臂、相得驩也。蓋公謹爲人、魁岸甚口善譚、嚮嚮乎若罪鋸屑。出文入武、洗洋百氏、旁綜衆藝、人所欽艶。性不甚著酒、酒間或及一義節事、則輒忼慨激烈、怒髮上衝冠、目光炯炯乎、亦不自覺。性爲

然也，亡何⁽⁴⁹⁾，遂中⁽⁵⁰⁾口語⁽⁵¹⁾以去。及⁽⁵²⁾口憲廟賓⁽⁵³⁾天⁽⁵⁴⁾，先侯請⁽⁵⁵⁾告，余亦出⁽⁵⁶⁾邸，養⁽⁵⁷⁾病讓洲上⁽⁵⁸⁾，以及⁽⁵⁹⁾徒⁽⁶⁰⁾今牛門⁽⁶¹⁾，以⁽⁶²⁾病故⁽⁶³⁾，不⁽⁶⁴⁾能⁽⁶⁵⁾尋⁽⁶⁶⁾舊驪⁽⁶⁷⁾，脩⁽⁶⁸⁾交其所⁽⁶⁹⁾知識⁽⁷⁰⁾諸君子矣。公謹亦因⁽⁷¹⁾風塵⁽⁷²⁾，不⁽⁷³⁾數⁽⁷⁴⁾數⁽⁷⁵⁾相過⁽⁷⁶⁾。然每⁽⁷⁷⁾過⁽⁷⁸⁾，未⁽⁷⁹⁾嘗不⁽⁸⁰⁾道⁽⁸¹⁾故相⁽⁸²⁾泣⁽⁸³⁾，彼一時也。一日袖⁽⁸⁴⁾其所⁽⁸⁵⁾著紫微字樣者相視⁽⁸⁶⁾，且言曰⁽⁸⁷⁾，我老矣⁽⁸⁸⁾，凡百者好⁽⁸⁹⁾，漸以廢落⁽⁹⁰⁾，惟者⁽⁹¹⁾書乃甚⁽⁹²⁾往時⁽⁹³⁾。然家貧⁽⁹⁴⁾，技雖⁽⁹⁵⁾癡安所⁽⁹⁶⁾得⁽⁹⁷⁾好帚墨⁽⁹⁸⁾以耗⁽⁹⁹⁾磨⁽¹⁰⁰⁾之哉。以故王侯每⁽¹⁰¹⁾徵⁽¹⁰²⁾，亦不⁽¹⁰³⁾甚拒⁽¹⁰⁴⁾，非⁽¹⁰⁵⁾彼焉⁽¹⁰⁶⁾，則高麗爾⁽¹⁰⁷⁾，易水墨⁽¹⁰⁸⁾，雖⁽¹⁰⁹⁾遇也⁽¹¹⁰⁾。童生蟻慕⁽¹¹¹⁾，頗惡⁽¹¹²⁾其煩⁽¹¹³⁾，然以⁽¹¹⁴⁾彼其所⁽¹¹⁵⁾求⁽¹¹⁶⁾，值⁽¹¹⁷⁾此其所⁽¹¹⁸⁾者⁽¹¹⁹⁾，亦不⁽¹²⁰⁾甚厭⁽¹²¹⁾也。近者⁽¹²²⁾爲⁽¹²³⁾一年少所⁽¹²⁴⁾聊蕭⁽¹²⁵⁾之⁽¹²⁶⁾，指⁽¹²⁷⁾摘世所⁽¹²⁸⁾稱內閣字府者⁽¹²⁹⁾，遂成⁽¹³⁰⁾一冊⁽¹³¹⁾。亦雞肋哉⁽¹³²⁾，爲⁽¹³³⁾之如何⁽¹³⁴⁾。余受而卒⁽¹³⁵⁾業⁽¹³⁶⁾，則駭然與而曰⁽¹³⁷⁾，吾口東方文章之盛⁽¹³⁸⁾，千百年唯有⁽¹³⁹⁾今日⁽¹⁴⁰⁾耳。顧⁽¹⁴¹⁾書亦然矣哉。解⁽¹⁴²⁾拘擊⁽¹⁴³⁾，破⁽¹⁴⁴⁾盲瞶⁽¹⁴⁵⁾，徵⁽¹⁴⁶⁾君乎海內⁽¹⁴⁷⁾誰歸也⁽¹⁴⁸⁾。夫羿善⁽¹⁴⁹⁾射⁽¹⁵⁰⁾，人獸⁽¹⁵¹⁾率⁽¹⁵²⁾，而不⁽¹⁵³⁾能⁽¹⁵⁴⁾俾⁽¹⁵⁵⁾鏃⁽¹⁵⁶⁾相承⁽¹⁵⁷⁾者⁽¹⁵⁸⁾，非邪⁽¹⁵⁹⁾。降⁽¹⁶⁰⁾格就⁽¹⁶¹⁾卑⁽¹⁶²⁾，庸何⁽¹⁶³⁾傷哉⁽¹⁶⁴⁾。公謹听⁽¹⁶⁵⁾然笑⁽¹⁶⁶⁾。因⁽¹⁶⁷⁾趣⁽¹⁶⁸⁾梓⁽¹⁶⁹⁾之⁽¹⁷⁰⁾。迺⁽¹⁷¹⁾鉸⁽¹⁷²⁾于余所⁽¹⁷³⁾以與⁽¹⁷⁴⁾公謹⁽¹⁷⁵⁾一驪⁽¹⁷⁶⁾，知⁽¹⁷⁷⁾識⁽¹⁷⁸⁾其爲⁽¹⁷⁹⁾人⁽¹⁸⁰⁾，弁⁽¹⁸¹⁾其首⁽¹⁸²⁾，以俾⁽¹⁸³⁾海內⁽¹⁸⁴⁾覽者⁽¹⁸⁵⁾，知⁽¹⁸⁶⁾區區⁽¹⁸⁷⁾非⁽¹⁸⁸⁾公謹⁽¹⁸⁹⁾本色⁽¹⁹⁰⁾也⁽¹⁹¹⁾。

〔語注〕

(1) (揚雄) 解嘲入或解縛而相、或釋褐而傳、(袁宏) 三國名臣序贊入釋褐中林、(2) 論語·先進入先進於禮樂野人也、(3) 漢書·趙充國傳入俱爲顯列、(4) 史記·司馬相如傳入縣令負弩矢先驅、(徐陵) 與王僧辯書入郡將州司、郊迎負弩、(5) 史記·高祖紀入令郡國諸侯各立高祖廟、以歲時祠、(6) (揚雄) 長楊賦入簡力狡獸、校武栗禽、(7) 禮記·檀弓下入儼然在憂服之中、論語·子張入望之儼然、同·堯曰入儼然、人望而畏之、(8) 詩·祈父入祈父、予王之爪牙、左傳·成公十二年入畧其武夫、以爲己腹心股肱爪牙、(9) 資治通鑑·光武帝建武二五年「辭言嫺雅」注入余謂、嫺、習也、(10) 論語·先進入文學、子游子夏、魏志·王粲傳入文帝爲五官將、及平原君植、皆好文學、(11) 北齊書·儒林傳入橫經受業之侶、遍於鄉邑、陳書·周弘正傳入降情屈禮橫經請益、(12) 國語·楚語下入趙簡子鳴中以相、南史·丘遲爲僕射讓光祿大夫序入飛翠鳴玉、出入禁門、

- (13) 詩·北山入或出入風議▽、南史·丘遲爲樸射讓光祿大夫表入飛翠鳴王、出入禁門▽。(14) 楚辭·離騷入倚闔闔而望余▽、(張衡) 西都賦入表曉闕於闔闔▽。
- (15) 漢書·蕭何曹參傳贊入漢興、依日月末光▽。(16) 呂氏春秋·仲冬紀·當務入周公旦曰、親親上恩▽。(17) 六韜·盈虛入錦繡文綺不衣▽。吳志·華覈傳入不待文綺以致愛▽。(18) 漢書·食貨志入金有三等、黃金爲上、白金爲中、赤金爲下▽。(19) 漢書·孝宣霍皇后傳入皇后舉駕、侍從甚盛▽。(20) (杜甫) 贈獻納起居田舍人澄詩入緣雲清切歌聲上▽、(劉楨) 贈徐幹詩入拘限清切禁▽。
- (21) 後漢書·儒林傳入安帝薄於藝文、博士倚席不講▽。
- (22) 後漢書·張衡傳入續聯翩兮、紛暗曖▽、舊唐書·高駢傳入節旄聯翩▽。(23) (白居易) 得微子到官後書備知通州之事詩入蟲蛇畫欄官道▽。(24) (韓愈) 詩入願語地上友、經營無太忙▽。(25) 史記·公孫弘傳入皆倍其約、順上旨▽。(26) 史記·李將軍傳入天子使中貴人從廣、勒習兵擊匈奴▽。(27) 禮記·曲禮上入堂上接武、堂下布武▽。(28) 唐書·上官儀傳入簞羽鷓鴣▽。
- (29) 書·畢命入欽若先王成烈、以休于前政▽。(30) 左傳·文公七入吾嘗同寮▽。(31) (白居易) 再答冕仲詩入他日過欽隨家風▽。(32) 史記·田蚡傳入其游如父子、然相得驩甚▽。(33) 漢書·江充傳入充爲人魁岸、容貌甚壯▽。(34) 左傳·昭公二六入有君子、白皙鬢鬢眉、甚口▽。(35) 韓非子·難言入言順比滑澤、洋洋纒纒然▽、楚辭·離騷入索胡繩之纒纒▽。(36) 晉書·胡母輔之傳入彥國吐佳言、如鋸木屑罪罪不絕▽、(蘇軾) 生日王郎以詩貝慶次其韻并寄茶二十一斤詩入高論無窮如鋸屑▽。(37) 史記·老莊申韓傳入其言洗洋自恣▽。
- (38) 漢書·敘傳入總百氏▽、晉書·陸雲傳入思樂百氏▽。(39) (嵇康) 琴賦入紛綸翕響、冠衆藝兮▽。
- (40) 唐書·李晟傳入虜皆指目歆艷▽。(41) 左傳·襄公二八入齋慶封好田而耆酒▽。(42) 後漢書·廉范傳入鴻慷慨有義節▽。(43) 楚辭·哀郢入好夫人之忼慨▽、史記·項羽紀入項王乃悲歌忼慨▽。(44) (蘇武) 詩入長歌正激烈▽、(李白) 擬古詩入弦聲何激烈▽。(45) 史記·趙世家入怒髮上衝冠▽。(46) 南史·檀道濟傳入目

- 光如炬▽。(47) (潘岳) 寡婦賦△目炯炯而不寢▽。
- (48) 孔子家語·致思△吾有三失、晚而自覺▽。(49) 漢書·翟方進傳△居亡何▽。(50) 漢書·楊惲傳△遭遇戀故、橫被口語▽。(51) 齊東野語△度宗賓天▽。(52) 漢書·汲黯傳△最後嚴助爲請告▽。(53) 漢書·敘傳△既至、以待中光祿大夫養病▽、禮記·射義△酒者所以養老也、所以養病也▽。(54) 管子·入國△屬之其鄉黨知識故人▽。(55) (高適) 封丘作△寧堪作吏風塵下▽、(戴叔倫) 贈殷亮詩△來往風塵共白頭▽。(56) (白居易) 醉後走筆酬劉五主簿長句之贈兼簡長大賈二十四先輩晁季詩△乘閒數數來相訪▽。(57) 史記·滑稽傳△久不相見·卒然相覩、懽然道故▽。(58) 史記·刺客傳△已而相泣、旁若無人者▽。(59) 孟子·公孫丑下△曰、彼一時、此一時也▽。(60) (韓愈) 何蕃傳△一日揖諸生▽。(61) 論語·述而△子曰、甚矣、吾衰也、久矣、吾不復夢見周公▽。(62) 說苑·建本△侯何嗜好▽、禮記·月令△節者欲▽。(63) 莊子·天地「無落吾事」釋文△落、猶廢也▽。(64) 漢書·史丹傳△左將軍丹、往時導朕以中正▽。(65) 史記·公孫弘傳△家貧、牧豕海上▽、漢書·司馬相如傳△家貧、貨賂不足以自贖▽。
- (66) 通俗編·藝術、技癢△風俗通、高漸離變姓名、傭保于人、聞堂上擊筑、技癢不能無出言▽。(67) 易·蠱△不事王侯、高尚其事▽。(68) 莊子·徐无鬼△羊肉不慕蟻、蟻慕羊肉▽。(69) (韓愈) 與李浙東書△近者閣下從事▽。(70) 韓詩外傳四△夫人主年少而放▽、戰國·魏策△寡人年少▽。(71) 弁州尺牘△足下聊蕭之▽。(72) 北史·王邵傳△指摘經史謬誤、爲讀書記三十卷▽、蜀志·孟光傳△光之指摘痛癢、多如是類▽。(73) 後漢書·楊修傳△夫雞肋、食之則無所得、棄之則如可惜▽。
- (74) 荀子·仲尼△周公卒業▽。(75) 禮記·孔子問居△子夏蹶然而起▽、莊子·在有△廣成子蹶然而起▽。
- (76) 史記·儒林傳△文章爾雅、訓辭深厚▽、漢書·公孫弘傳贊△文章司馬遷相如▽。(77) (揚雄) 太玄賦△蕩然肆志、不拘攣兮▽、(潘岳) 西征賦△陋吾人之拘攣、飄萍浮而蓬轉▽。(78) 孟子·梁惠王上△海內之地、方千里者九▽。(79) 孟子·盡心上△羿不爲拙射變

其戮率[∇]。(80)易・歸妹[∧]跛能履吉、相承也[∇]。(81)史記・伯夷傳[∧]所謂天道耶非耶[∇]。(82)(皎然)詩式[∧]假使曹劉降格爲之、未知孰勝[∇]。(83)國語・魯語下[∧]醉而怒、醒而喜、庸何傷[∇]。(84)(司馬相如)上林賦[∧]亡是公听然而笑[∇]。(85)(孔安國)尚書序[∧]觀史籍之煩文、懼覽者之不一[∇]。(86)左傳、襄公十七[∧]宋國區區[∇]。(87)唐書、柳仲郢傳[∧]仲郢以爲、豎有本色官[∇]、後山詩話[∧]雖極天下之工、要非本色[∇]。

紫薇字様の序⁽¹⁾

私が初めて柳沢藩に仕官したとき、広沢・藤公謹⁽²⁾(細井広沢)は、もうすでに先輩として奉職しており、いつも弓を背負った徒者を引き連れ、定期的に武芸を披露するなど、藩邸では武臣として扱われていた。しかし、以前から「文学」に慣れ親しんでいたために、時には我々「儒臣」と一緒に書物を抱えて將軍家(綱吉)に出入りし、直接「將軍綱吉に」拜謁する榮譽に浴して立派な品々を贈ったこともあって、近従の清切

なる臣ともみなされていた。こうしたことが数年に及んだが、「將軍家における講義では」いつも拜聴するだけで退席し⁽³⁾、天下の大道を一緒に軽やかに歩いた帰り道ではお互いに振り向きざまに話して止むことがなかった。あるいは將軍家の命によって御側小姓であった人々の学問を監督したり⁽⁴⁾、藩邸の史書校注の仕事⁽⁵⁾をみたり、一緒にうやうやしく「藩主柳沢吉保の前に」進んで以前の政治について報告することもした⁽⁶⁾。同じ藩に仕えていたことから仕事の暇な折には、「お互いの家に」立ち寄って一緒に飲んで意気投合して喜ぶ⁽⁷⁾といったつきあいだった。

公謹という人は、弁舌が非常に巧みであり、美しい言葉が次々と飛びだした。「文」から「武」に進んで、多くの先人の議論やいろいろな技芸を身につけていたことは、人々が羨むところであった。もともと酒は強くないが、酒を飲んだ折りにたまたま大切な論議に及ぶ⁽⁸⁾ことでもあれば、非常に憤激して怒髪天を衝く勢いとなり、怒りで目が輝き、我を失うといった在り様で

あった。こうした人物であったから、ほどなく讒言にあって「藩邸を」去っていった。

憲廟(綱吉)が亡くなられ、先代の藩侯(柳沢吉保)が退かれると、私もまた藩邸を去って護洲「茅場町」で病気を癒し、現在の牛門「牛込」の居所に移ってからも、病気の為に知り合いの人々と旧交を暖めることができなかった。公謹もまた生活が苦しく、しばしば行き来するわけではなかったが、会うたびに昔のことを語ってお互いに涙するのは、時世の移り変りのためであろう。あるとき自著の「紫微字様」を袂から取りだし、それを示して次のように言った……

《私も年をとった。数多くあった趣味もだんだんと減ったが、ただ書を好むことだけは昔よりも甚だしい。しかし、貧しいために、技術も發揮できず齒痒く思っても、よい紙と墨を手に入れてそれを示すこともできない。だから、王侯から依頼があってもきっぱりとは断ることができない。彼らでなくて高麗の繭紙や易水の墨を手にいれがたいからだ、若い人々が慕ってくる

のも煩わしくて嫌なのだが、彼らの求めるものが私の嗜むものに当たるから、まったく嫌だとはいえない。

近頃、一人の若輩者によって世間の評判となったものだが、「内閣字府」という書籍を批判して一冊の本を作った。捨てるに惜しいが、どうしたものだろうか。私はそれを受取り、読み終えると驚き関心して、次のように述べた……

《吾が東方日本において文章が盛んなことは、千百年のうちでも今日だけである。書についても同じである。不自由な手の動きを解きほぐし無知を打破することとは、国内で君以外に誰に求められようか。あの「堯の世の名人」羿が弓を引きしほり方を教えても、鏃を次々に的に当てられなかったとしたら、「弓の教えとしては」誤りであろう。⁽⁸⁾「分かりやすく教えるために」品格を卑くすることは問題になるまい。》

公謹は喜びに溢れて笑った。

そこで、たちまち上梓することになった。序文の冒頭で、私が公謹と親しく、その人柄をよく知っている

理由を述べたのは、「紫薇字様」にみえるような「細々した事柄にこだわるのは彼本来の姿ではないことを読者に知らせたかったからである。

〔訳注〕

(1) 本作品の成立年代は、江戸柳枝軒小川彦九郎刊『紫薇字様』（享保九年）に「享保四禩己亥四月」と書かれていることから、享保四（一七一九）年と確定できる。なお、『紫薇字様』は、唐様の書法が盛んとなるなかで、明の黄鑿編『内閣秘伝字府』を準拠とする佐々木志頭磨らが勢力をもったことを批判して、細井広沢が唐様書法の正統を示すために著したものである（西川寧編『日本書論集成』第一巻、一九七八年、汲古書院、に所収された北川博邦氏の解題による）。

(2) 細井知慎、字は公謹、広沢・菊叢・玉川などと号す。儒学を坂井漸軒に、書を北島雪山に書び、その外に兵学・天文・歌道などにも通じて一家をなし

た。柳沢吉保に仕え、その後一時は幕府の儒官にもなり、享保二十（一七三五）年、七十八歳で没している。徂徠との親交については、元禄九（一六九六）年に徂徠が三宅休と結婚したとき、その媒酌人を広沢がつとめたことから、かなり親密であったことが知られる。

(3) 徂徠は、細井広沢や志村楨幹らとともに、たびたび江戸城に登城して將軍綱吉の経書講義を聞いた。儒学に関する講義をしており、ときには時服などを拝領している。もちろん綱吉が柳沢吉保の屋敷を訪れて、経書の講義をしたり儒臣の講義を聞くことも多かったが、ここは前後の文脈から、前者のことを指していると考えてよいだろう。

(4) 綱吉近侍の小姓のうち十二名が、学問上の落度から柳沢吉保と松平貞輝に預けられており、柳沢家では徂徠などの儒臣が彼らを監督していた。ここはそうした事実を指している。このことの詳しい考察は、平石直昭氏の『荻生徂徠年譜考』一八九〜

九五頁にみえる。

(5) 柳沢家では後に柳沢藩蔵版としてその一部が出版された廿一史の校讐を行っており、そのための部局(史局)が設けられていた。徂徠が志村楨幹らとともに訓点校注を施した「晋書」「宋書」など五史は元禄十四(一七〇二)年から宝永三(一七〇六)年にかけて出版されたが、広沢はこうした作業の様子を見にきたと推測される。

(6) 川越親捨て事件の処理や藩の軍制改革などに徂徠が意見を求められたという話はよく知られており、ここは徂徠や広沢などが藩の政治について意見

贈_レ子和之_三三河_二掌_中書記_上序

子和狂生哉、⁽¹⁾ 迺奥人也。奥之爲_レ州、⁽²⁾ 延袤且數千里。盖嘗按_レ地經、⁽³⁾ 稽_レ其表所_レ曷、⁽⁴⁾ 極星之高庫與_レ寒燠、⁽⁵⁾ 所_レ以大逕廷_レ者、⁽⁶⁾ 則我燕_レ代哉。其地出_レ良馬、⁽⁷⁾ 其山莽宕、⁽⁸⁾ 其水淖滯、⁽⁹⁾ 其人癡而勇、⁽¹⁰⁾ 重遲鮮_レ浮慧。至_レ於不逞之徒、⁽¹¹⁾ 發_レ難阻_レ山谷、⁽¹²⁾ 以_レ藪澤_レ亡命、⁽¹³⁾ 拒_レ順弗_レ驟

を述べて関与したということであろう。

(7) 原文「拒臂」とあるが、注(1)に挙げた刊本『紫微字様』所収の文章では「把臂」となり、意味上から「把臂」で解釈した。

(8) これは、語注に掲げた弓の名人羿がへたな者を教える場合にも「藪率」を変えなかったという『孟子』尽心上篇にみえる話と、『列子』仲尼篇の「言善射者、能令後鏃中前括、発発相及、矢矢相属、前矢造準、而無絶落、後矢之括猶銜弦、視之若一焉」と、前の矢に後の矢が次々に当たったという話を結びつけたものであろう。(澤井)

從_レ、盤結牢乎不可_レ解、⁽¹⁵⁾ 喻母_レ聽、⁽¹⁶⁾ 攻母_レ能破、⁽¹⁷⁾ 以勞_レ王師、⁽¹⁸⁾ 彈_レ海内之賦、⁽¹⁹⁾ 莫_レ如_レ之何。古來惟奥爲_レ然矣。昔在_レ大寶之世、⁽²⁰⁾ 瓜_レ分扶桑之壤、⁽²¹⁾ 郡_レ縣之、⁽²²⁾ 則奥實蔽_レ它數十州之地、⁽²³⁾ 特置_レ鎮東府其北竟、⁽²⁴⁾ 大將軍治焉、⁽²⁵⁾ 與_レ筑之鎮西、⁽²⁶⁾ 屹然乎隻峙云。西以備_レ唐、⁽²⁷⁾ 而東控_レ制毛

人。(25) 毛人雖_レ獷乎、豈唐之儔哉。則輿之大與_レ俗躔、可_レ知已。然猶且世不_レ易_レ帖服、如_レ達谷_レ盤具諸王、及安氏_レ清氏、其著者。迺士之以_レ武鸞_レ稱、舉_レ九服、莫輿是若。(28) 而文教之化、歷_レ千餘歲之久、闔_レ野鬱遏、不_レ得_レ耀_レ於光明。(30) 何晚也。及_レ口神祖龜_レ定區宇、而後輿之以_レ賦_レ百萬_レ國者數十、皆得_レ比_レ古太守。職兼_レ文武、子育_レ其封內。(36) 於是乎百年、始有_レ子和者出焉。夫輿之俗、母_レ更_レ都雅_レ也、山水母_レ更_レ秀而潔也、何其_レ揆_レ藻_レ迺爾翩翩乎。文王作_レ人、可_レ謂_レ信哉。子和飲_レ酒傲睨、深慕_レ伯儉_レ青蓮_レ之爲_レ人、嚶嚶然惟古之徒。(46) 迺其所_レ爲_レ迂遠濶_レ於事情、猶稟_レ命輿_レ之土_レ邪。不_レ遠_レ千里、南遊_レ吾黨、愈益自意、攻_レ古文辭。居則言_レ其志_レ也。曰、吾輿、北鄰_レ毛人、而西辭海、東弱水、以_レ左右_レ望_レ三韓與_レ蓬瀛_レ之洲也。吾既生不_レ當_レ秦皇漢武_レ之世。安所_レ得_レ拔_レ毛人之毛、襲_レ以_レ衣冠。(55) 迺毛_レ其土_レ乎。幸從_レ物先生、修_レ不朽_レ之業、則王喬_レ安期生、且莫而遇_レ之。(57) 所_レ憾者未_レ能濯_レ纓_レ浪水、而石_レ我詩醫無閭_レ之顛、是已。物先生謂_レ予也。由_レ是吾黨之

士、目之以_レ狂。子和誠狂生哉。是歲己亥秋、朝鮮聘使、當_レ過_レ三河、而州侯職當_レ供張、(59) 迺徵_レ子和、委以_レ書記_レ之任。六月望、造_レ予別_レ矣。予酌_レ之酒、以言曰、子弗_レ往而彼來。神之與_レ契哉。(60) 子行矣。夫三河者、今豐沛也。杜若之水、鳳來之山、鬱鬱乎佳氣、庶以_レ睹_レ風之所_レ自邪。子與_レ韓客、把_レ臂其間乎。特浪與_レ醫無閭_レ云乎哉。子行矣。子和受_レ爵而飲、盡_レ石迺醉、(64) 悲歌_レ忱慨、旁若_レ無人。(66) 歌未_レ畢、忽愀然久之曰、吾聞_レ之、朝鮮者燕之屬也。其風土吾等耳。然又近_レ虜。(69) 虜酒薄、千鍾不_レ醉_レ人。彼其習_レ於飲_レ邪。安能飲_レ吾酒_レ而吾之敵哉。是猶可_レ憾也。遂去。子和誠狂生哉。

〔語注〕

(1) 史記·酈生傳 酈生年六十餘、長八尺、人皆謂之狂生。(2) 史記·蒙恬傳 起臨洮至遼東、延袤萬餘里。(3) 周禮·考工記·匠人 畫參諸日中之景、夜考之極星、以正朝夕。(4) 淮南子·時則訓 孟冬之

- 月、營丘隴之小大高庫。 (5) 漢書·天文志入日進爲暑、退爲寒、若日之南北失節、暑過而長爲常寒、退而短爲常燠、此寒燠之表也。 (6) 莊子·逍遙遊入大有逕庭。 (7) (班彪) 北征賦入野蕭條以莽蕩。 (8) 淮南子·汜論訓入鸚者類而非勇。 (9) 荀子·修身入卑涇重遲貪利、則抗之以高志。 史記·酷吏·杜周傳入重遲外寬、內深次骨。 (10) 左傳·襄公十年入五族聚群不逞之人、因公子之徒以亂。 後漢書·史弼傳入外聚剽輕不逞之徒。 (11) 左傳·定公一四年入盍以其先發難也、討於趙氏。 (12) 漢書·高帝紀下入秦、形勝之國也。 帶河阻山、縣隔千里。 漢書·蕭望之傳入以鄆名賊梁子政阻山爲害、久下伏辜。 (13) (司馬相如) 難蜀父老賦入羅者猶視乎鰲澤。 書·武成入爲天下逋逃主、萃淵藪。 (14) 史記·張耳傳入少時管亡命、游外黃。 (15) 吳志·鐘離牧傳入諸夷盤結、宜以漸安。 (16) 孟子·梁惠王下入簞食壺漿以迎王師。 (17) 孟子·梁惠王上入海內之地、方千里者九。 (18) (李白) 將進酒詩入古來賢達皆寂寞、惟有飲者留其名。 (19) 漢書·賈誼傳入高帝瓜分天下、以王功臣。 (20) (王維) 送晁監詩入鄉國扶桑外、主人孤島中。 (21) 史記·始皇本紀入海內爲郡縣。 (22) (王延壽) 魯靈光殿賦入屹然特立、的爾殊形。 (23) (潘岳) 西征賦入儀景星於天漢、列牛女以雙峙。 (24) 北史·魏道武帝紀入昔朕遠祖、總御幽都、控制遐國。 (25) 宋書·倭國傳入東征毛人。 (26) (王安石) 曹公行狀入後遂帖服、皆爲用。 (27) 吳志·陸抗傳入今敵跨制九服。 (28) 詩·閟宮入至于海邦、淮夷蠻貊、及彼南夷、莫不率從、莫敢不諾、魯侯是若。 (29) 書·禹貢入五百里綏服、三百里揆文教、二百里奮衛。 (30) (司馬相如) 難蜀父老入習爽闇昧、得耀乎光明。 (31) 論語·子路入何晏也。 (32) 書·康王之誥入畢協賞罰、戡定厥功。 (33) 晉書·地理志入表提類而分區宇、判山河考疆域。 (34) 史記·李將軍傳入於是乃徒爲上郡太守。 (35) 詩、六月入文武吉甫、萬邦爲憲。 (36) 左傳·成公二年入使齋之封內、盡東其畝。 (37) 吳志·孫韶傳入儀貌都雅。 (38) 魏志·賈詡傳

入吳蜀雖蕞爾小國、依阻山水、(左思)招隱詩入非必
 糸與竹、山水有清音、(39)(顧瑛)巫峽雲濤石屏詩
 入秀潔庚庚絕文理、(40)孟子·盡心下入以至仁伐至
 不仁、而何其血之流杵也、(41)(左思)蜀郡賦入擗
 藻揆天庭、(柳顯言)奉和晚日楊子江應教詩入揆藻麗
 繁星、高論光朝日、(42)(魏文帝)與吳質書入元瑜
 書記、翩翩致足樂也、(43)詩·棫樸入周王壽考、遐
 不作人、(44)(郭璞)江賦入冰夷倚浪以傲睨、
 (杜甫)白水崔少府十九翁高齋三十韻詩入清晨陪躋攀、
 傲睨俯峭壁、(45)史記·司馬相如傳入慕閭相如之爲
 人、(46)孟子·盡心下入其志嚶嚶然、曰古之人、古
 之人、(47)史記·孟子傳入梁惠王不果所言、則見以
 爲迂遠而闊於事情、(48)論衡·氣壽入凡人稟命有二
 品、(49)孟子·梁惠王上入叟不遠千里而來、(50)
 莊子·天地入子貢南遊於楚、(51)論語·公冶長入吾
 黨之小子狂簡、(52)老子·三一章入君子居則貴左、
 (53)書·舜典入詩言志、歌永言、論語·先進入盍各
 言爾志、(54)孟子·公孫丑下入以左右望而罔市利、

(55)論語·堯曰入君子正其衣冠、尊其瞻視、(56)
 (魏文帝)典論論文入文章經國之大業、不朽之盛事、
 (57)莊子·齊物論入萬世之後、而一遇大聖知其解者、
 是且暮遇之也、(58)孟子·離婁上入滄浪之水清兮、
 可以濯我纓、(59)漢書·王尊傳入後上行幸雍過虢、
 尊供張如法而辦、(韓愈)送楊少尹序入於時公卿設供
 張、祖道東都門外、(60)(陸機)漢高祖功臣頌入策
 出無方、思入神契、(61)後漢書·光武紀入氣佳哉、
 鬱鬱葱葱然、(62)中庸入知遠之近、知風之自、知微
 之顯、可與入德矣、(63)莊子·田子方入吾終身與汝
 交一臂、(64)史記·滑稽傳入一石亦醉、(65)史
 記·項羽本紀入於是項王乃悲歌忼慨、同·貨殖傳
 入丈夫相聚遊戲、悲歌忼慨、(66)史記·刺客傳入荆
 軻嗜酒、日與狗屠及高漸離飲於燕市、酒酣以往、高漸
 離擊筑、荆軻和而歌於市中、相樂也、已而相泣、旁若
 無人者、(67)禮記·哀公問入孔子愀然作色而對、
 (68)國語·周語上入瞽率音官、以省風土、(69)(高
 適)營州歌入虜酒千鐘不醉人、胡兒十歲能騎馬、

(70) 詩・揚之水へ彼其之子¹⁾。

子河の三河に之きて書記を掌るに贈るの序¹⁾

子和²⁾(平野金華)は「狂生」である。そして奥の地の人である。

奥は一つの州だが、その広さ数千里四方にも及ぶ。

試みに地理書を調べると、日影柱の柱影(太陽の高度)、北極星の高度、そして暑き寒さが「江戸と」おおいに異なるところからすれば、われわれにとつての燕、代の地方なのだ。その地は良馬を産し、その山は広々とし、その川はゆったりと流れ、その人々の性質は頑迷にして勇敢、鈍重ではあるが軽薄な利口さはない。しかし、不逞のやからが、山谷に依つて反乱を起こし、沼地に逃げ込んで、帰順を拒んで従わず、固く団結してけつして仲間割れしないという事態に至つては、論しても聞き入れられず、攻撃しても撃破できず、王者の軍隊を煩わせ、国内の軍賦のすべてを費やしても、どうすることもできないのだ。古来、奥の地

こそはこのようなところであった。

昔、大宝年間に日本の地を分割し、郡県に区分したさい、奥の地の広さは、その他の数十州の地の広さに匹敵しているので、とくに鎮東府をその北境に置き、大將軍が治めた。筑前の鎮西府とともに屹然としてならびたつたということだ。鎮西府は唐に備え、鎮東府は毛人を警戒するためであった。毛人は荒々しいといつても、唐と同類ではないことは明らかだ。奥の地の広さとその風俗の頑迷さがわかるというものだ。しかもなお、たえず軽々しくは服従しないものがおり、達谷、盤具の諸王および安倍氏、清原氏はその著しい例であった。そこで、武勇をもつて称せられる土が、辺境を征伐し、(人々は)広漠たる奥に従つたのであつた。³⁾しかし、文教の化は千年以上も経ていきわたらず、文明化されなかつた。なんとまあ晩かつたことよ。神祖が国内を平定するに及んで、奥の地には百万もの民を擁する国が数十、古の大守に比せられ、もつばら文武を兼ね、その領内の民を子の如く育んだ。こうして

百年、ようやく子和なるものが出現したのだ。そもそも奥の地の風俗はその優雅さを増してはいないし、山水はその清冽な美しさを増してはいない。にもかかわらず、どうして（今日になって）典雅な文辭がかくも盛んになったのであろうか。「文王は人間を新しくした」というのは真実というべきである。

子和は酒を飲むと氣宇壮大となる。深く劉伶・李白⁽⁴⁾の人となりを慕い、言志の雄大なさま、古の徒であるが、迂遠な点があるのは、奥の地に生まれたからであるか。千里を遠しとせずして、南へ下ってわが仲間たちに加わり、ますます喜んで、古文辭を学んだのであるが、いつもその志を述べては、次のように言った。

「わが奥の地は、北は毛人、西は瀚海⁽⁵⁾、東は弱水に隣し、左右には三韓と蓬萊を望む。しかし、私は、秦の始皇帝や漢の武帝の時代に生まれてはいない。どうして毛人に衣服を着せ、その土地に作物を植えつけさせることができようか。しかし、私はさいわいにも物

先生に従い、永久に朽ち果てることのない文章の業を修めているので、（古の仙人）王喬・安期生⁽⁶⁾に朝晩あえるのだが、残念なのは、いまだ（実際、辺境の地に赴き）冠の紐を浪水で洗い、私の詩を医無閭山の頂上⁽⁷⁾に刻することのできないこと、これだけだ。

「物先生」とは私のことであるが、こういうことであるから、わが仲間たちは子和を目して「狂」としたのだ。⁽⁸⁾ 子和はまことに狂生なのだ。

今年、己亥の年、朝鮮の通信使⁽⁹⁾が三河を通過するにあたり、州侯はもっぱら接待にあたることとなり、そこで子和を召して書記の任にあたらせることとした。

六月の望月の日、私のもとへ別れを告げに来た。

私は、かれに酒をつなぎながら言った。

「きみが行かずして、むこうからやって来たのは、不可思議な巡り合わせだ。ぜひ行きたまえ。そもそも、三河は、今日の豊沛⁽¹⁰⁾である。かきつばたの咲き乱れる八橋の流れ⁽¹¹⁾、鳳来の山なみに、秀れた気が鬱勃として起こったのだが、願わくばその風化のよってきた

るところを見たいものだ。きみは韓の客人と親交を結んだらどうか。冠の紐を涙水で洗わなくとも、詩を医無閭山の頂上に刻さなくともよいではないか。ぜひ行きたまえ。」

子 and はさかずきを受け、飲みほした。一石ほど飲み尽くして酔い、あたかもまわりに人のいないかのごとくに一人悲しげに歌っていたが、歌い終わらないうちに、たちまちのうちに憂いに沈みつつ、言った。

「聞くところによれば、朝鮮は燕の仲間であり、その風土はわが奥の地に類似しているようだ。しかしまた、夷狄にも近い。夷狄の酒は弱いので、どれほど飲んでも人を酔わせない。かれらは酒に飲み慣れていないのではないか。わが国の酒を飲んで、私は太刀打ちできないだろう。これもまた残念なことだ。」

そして去って行った。

子 and はほんとうに「狂生」であるのだ。

〔訳注〕

(1) 本文に従って、享保四(一七一九)年の作と考えられる。なお、子 and の三河行きにかんしては服部南郭に「送子 and 序」(南郭文集初編卷六)、太宰春台に「送平野子 and 往刈谷序」(紫芝園前稿卷三)、また山県周南に「東都送平野子 and 之參州」(周南文集卷四)なる詩がある。

(2) 子 and、姓は平野、名は玄沖、金華と号し、源右衛門と称す。子 and は字。元禄元(一六八八)年、奥州三春に生る。江戸に出て医術を学び、のち徂徠に就く。護園中、詩文において名高い。享保一七(一七三二)年四五才にて没す。「金華稿刪」、「文莊先生遺集」がある。なお、若水俊「平野金華の生涯と思想」(茨城女子短大紀要一三集 一九八六)も参照されたい。

(3) 「日本紀略」によれば、延暦二(一〇一四)年四月一日、蝦夷の長、夷大墓公阿呂利為、盤具公母礼などが五百人余の部下を率いて坂上田村麻呂に投降した

という。達谷は阿巳利為の本拠のあったとされる地
 (「吾妻鏡」文治五年九月二八日の条)。安倍氏は前
 九年の役において源義家に、清原氏は後三年の役に
 おいて源頼義に討伐された。

(4) 劉伶、字は伯倫。晋の人、「酒徳頌」の作者。
 李白、字は青蓮。唐の人。

(5) 翰海は中国の北辺にある海、弱水は中国の辺境
 にある川、蓬来は山東半島の東に浮かぶ仙境。

(6) 王喬、王子喬のこと。中国上代の仙人。好んで
 笙を吹き、鳳鳴をなした。伊洛の間に遊び、のち登
 仙した。安期生は山東琅邪の仙人。秦漢の際、薬を
 海辺に売り、のち蓬来山の下へ去った。

(7) 涇水は中国と朝鮮の国境を流れる川、医無閭山
 は中国の東北、幽州にある山。

歸鞍吟草敍

鎮西申君、有_レ歸鞍吟草之作_一。其友人竹春庵、千里寄_レ
 示_一、謁_予一言。夫筑。自_レ貝先生_二而後、_レ不_レ稱_レ説_一

(8) たとえば春台は「然子和狂生哉」(「送平野子和
 往刈谷序」)とし、南郭は「盖余亦時時伺知其狂有
 所託也」(「送子和序」)としている。

(9) 吉宗の襲職を祝賀する享保四年の通信使に對す
 る儀礼は、前回、正徳通信使のさい新井白石によつ
 て変更されたものが旧に復した。なお、当時の刈谷
 二万三千石の藩主は三浦明敬。

(10) 三河は家康の故地、江蘇省沛県豊邑は漢の高祖
 劉邦の故地。

(11) 「かきつばたの咲き乱れる八橋の流れ」は伊勢
 物語をふまえている。

(12) 鳳来の山なみ、文武天皇のとき、病氣治癒の祈
 禱のため、この地の仙人を鳳に駕し、京に至らしめ
 たという。(岡本)

詩書_一者、而申君最辨博哉。蓋其人文武自負_一、不_レ欲_レ
 以_レ經生_一自見_一。馳_レ騁_レ百氏_一、凌_レ厲_レ千古_一、出_レ玄入_レ禪_一、

奇正雲湧⁽¹³⁾、其才洵不可測也已。段使與⁽¹⁴⁾吾曹⁽¹⁵⁾猝然相⁽¹⁶⁾遇廣陵船中、命⁽¹⁷⁾觴飛⁽¹⁷⁾籌、拄⁽¹⁸⁾麈對⁽¹⁸⁾壘、宏思豪懷、瞰⁽¹⁹⁾大海以稱⁽¹⁹⁾快、高談劇論、應⁽²⁰⁾怒濤⁽²⁰⁾而爭⁽²¹⁾雄、則弁州之於⁽²²⁾於大夫⁽²²⁾不啻也。然此莫⁽²³⁾得⁽²³⁾往、彼不⁽²⁴⁾能⁽²⁴⁾來、匏⁽²⁴⁾繫⁽²⁴⁾各天、徒想⁽²⁵⁾其肩⁽²⁵⁾宇⁽²⁶⁾此編⁽²⁶⁾耳。可不⁽²⁷⁾恨⁽²⁷⁾哉。夫申君豈欲⁽²⁸⁾以⁽²⁸⁾詩傳⁽²⁸⁾、而詩盡⁽²⁹⁾申君⁽²⁹⁾乎。然予識⁽³⁰⁾申君於此⁽³⁰⁾、而申君獨⁽³¹⁾以⁽³¹⁾此傳⁽³¹⁾、可謂⁽³²⁾命⁽³²⁾矣。所⁽³³⁾賴⁽³³⁾者、方⁽³⁴⁾今筑侯新立⁽³⁴⁾、綱⁽³⁵⁾紀⁽³⁵⁾悉張⁽³⁵⁾、者⁽³⁶⁾舊⁽³⁶⁾遺⁽³⁶⁾、考⁽³⁷⁾行⁽³⁷⁾將⁽³⁸⁾試用⁽³⁸⁾、則申君何必⁽³⁹⁾以⁽³⁹⁾詩傳⁽³⁹⁾哉。詩果不⁽⁴⁰⁾盡⁽⁴⁰⁾申君⁽⁴⁰⁾也。

〔語注〕

(1) (袁桷) 句曲山迎眞送眞詞序入張伯雨道士寄示陸魯望句曲山朝眞詞二章。(2) 漢書·鼂錯傳入還因上書稱說。(3) 風俗通·正失入天資辨博、善爲文辭、人物志入辨博之人論理。(4) 詩·六月入文武吉甫。(5) 史記·高祖紀入高祖乃心獨喜·自負。(6) 後漢書·蔡玄傳入若乃經生所處、不遠萬里之路。(7) 史記·虞卿傳贊入亦不能著書以自見于後世云、老子·

二入爲天下民不自見。(8) 晉書·江道傳入馳騁極於六藝、老子·十二入馳騁田獵。(9) 漢書·敘傳入緯六經、綴道綱、總百氏、贊篇章、晉書·陸雲傳入思樂百氏、博採其珍。(10) (班固) 覽海賦入登雲塗以凌厲、(李白) 詩入雙萍易飄轉、獨鶴思凌厲。(11) (宋之問) 駕出長安詩入聖德超千古、(李白) 詩入芳名動千古。(12) (蕭子良) 淨法子入禪出禪者、勸總行衆善、(宋之問) 詩入禪從鳩繞、說法有龍聽。(13) 孫子·兵勢入戰勢不過奇正、史記·田單傳入奇正還相生。(14) (白居易) 題薔薇架詩入根動形雲湧、枝搖赤羽翔。(15) (杜甫) 赴青城縣出成都寄陶王二少尹詩入客情投異縣、詩態憶吾曹。(16) (蘇軾) 留侯論入猝然相遇於草野之間。(17) (謝靈運) 詩入賓至可命觴、朋來當染翰。(18) 晉書·宣帝紀入與之對壘百餘日。(19) 晉書·楊濟傳入六軍大叫稱快。(20) 後漢書·馬衍傳入申眉高談、無愧天下、晉書·殷浩傳入高談莊老說。(21) 元史·元明善傳入每與虞集劇論、聞見錄入行處每客參

劇論V。(22) (孟貫) 詩入江上秋風捲怒濤V。(23)

(杜牧) 詩入可憐赤壁爭雄渡V。(24) 論語・陽貨入吾

豈匏瓜也哉。焉能繫而不食V。(25) (任昉) 詩入弗觀

朱顏好、徒想平生人V。(26) (枚乘) 七發入陽氣見於

眉宇之間V。(27) (古詩) 爲焦仲卿妻作入生人作死

別、恨恨那可論V、(陸機) 謝平原內史表入而不能不

恨恨V。(28) 漢書・高帝紀入新立、未能盡圖其功V。

(29) 詩・棫樸入勉勉我王、綱紀四方V、荀子・勸學

入禮者法之大本、類之綱紀也V。(30) 後漢書・魯恭傳

入至列卿郡守者數十人、而其耆舊大姓、或不蒙薦舉V、

晉書・陳壽傳入壽撰益都舊傳十篇V。(31) 詩・魏風

「行與子還兮」注入行、猶將也V。(32) 漢書・東方朔

傳入欲求試用V。

帰鞍吟草の叙⁽¹⁾

鎮西の申君(神屋立軒)⁽²⁾に「帰鞍吟草」という作品

がある。その友人の竹春庵(竹田春庵)⁽³⁾が遠く手紙を

よこし、私の言葉を求めてきた。貝先生(貝原益軒)

以来、筑前では詩文を論ずる者が少なくないが、なか

でも申君はその学識が最も広いという。彼は文武を自

負して經学の徒として知られることを望んでいない

が、多くの書籍を涉獵して古えを熟知しており、また

老莊や禪にも造詣が深く、「文章の」正攻法も奇法も自

由自在であつて、本當にその才能は測りしれない。も

しも、私やその仲間と突然に広陵(広島)の船上で会

つたならば、酒を汲み交わし法子を持つて広大で雄々

しい思いを述べ、「安芸の」大海を眺めて心樂しく論

議し、「海の」怒濤と呼応しながらお互いを競えば、

兪州(王世貞)と於大夫との出会いにも劣りはしまい。

だが、私どもは出かけることができず、彼もまた来る

ことができないからには、匏が「別々に」ぶら下がっ

ているように、それぞれの「天」に従うほかはない。

いまはただ、この作品から申君の容貌を想像するだけ

で、恨みはまことに尽きない。

申君は詩によつて「後世に」名を残そうとしたわけ

でもなく、また詩が申君のことをすべて尽くしている

のでもない。しかし、私は申君のことを詩において知るだけであり、申君が詩によって名を残すことも「命」というしかない。だが、頼みとするところは、いままさに筑前侯（黒田継高）が新たに継嗣されたが、陋習を一新する政治改革が行なわれ、いままで疎んじられていた人々も登用されようとしていることにある。とすれば、申君が詩によって名を残すことはなく、また詩も申君のことを尽くすことにはなるまい。

〔訳注〕

(1) 早稲田大学図書館蔵『帰鞍吟草』（享保七年・阿州徳島通町書林中村兵衛板）には『徂徠集』所収「帰鞍吟草叙」と同文の「帰鞍吟草跋」が載せられているが、その日付は「享保庚子夏四月」となっており、ここから本作品の成立時期を享保五（一七二〇）年夏と確定できる。なお、平石直昭氏の『荻生徂徠年譜考』では、本文にみえる黒田継高の継嗣時期から享保五年春ないし享保四年冬と推定されている。

だが、正しくは享保五年夏である。

(2) 神屋亨、字は原明、立軒・松堂などと号す。貝原益軒に師事し、福岡藩儒となり、享保十四（一七二九）年に六十六歳で没す。著作として『帰鞍吟草』の外に『西海勝覧』『宗像春秋』がある。『帰鞍吟草』は、神屋立軒が宝永元（一七〇四）年十月に江戸を発って福岡に帰るまでの間に作った詩文を集めたものであるが、先に述べた早稲田大学図書館蔵『帰鞍吟草』には「宝永丙戌（三年）季冬十日」の日付をもつ貝原損軒（益軒）の「書帰鞍吟草後」が載せられていることから、このときまでには成立していたと考えられる。なお、『帰鞍吟草』には、徂徠・益軒以外にも、「正徳乙未五年」の日付がある積大潮の「帰鞍吟草序」と、「享保戊戌（三年）」の日付がある三宅観瀾の「題帰鞍吟草」が載せられている。

(3) 竹田定直、字は子敬、春庵と号す。神屋立軒と同じく貝原益軒に師事した福岡藩儒であった。延享

二（一七四五）年に八十五歳で没している。竹田春庵は、『帰鞍吟草』の出版を実質的に推進した人物と考えられ、但徠の序文はもちろんのこと釈大潮や三宅観瀾の序文も、この春庵の交遊のなかから獲得されたものである。『但徠集』には、春庵宛ての書簡六通が所収されているが、その考証については平石直昭氏の『荻生但徠年譜考』に詳しく述べられている。

（4）ここでなぜ広陵（広島）がでてくるのか不明である。『帰鞍吟草』で特に広陵（広島）が詠まれているわけではない。後にみえる王世貞と於大夫との話が武陵に関わることからの連想とも、すでに訳注稿（二）で扱った「広陵問槎録序」にみえていたように広陵（広島）の景色がとりわけ詩になると但徠が考えていたためとも推測される。

（5）王世貞が於大夫（於信夫）に会ったということ は、『弁州山人四部稿』卷三十二に「癸酉冬、余遷嶺右、阻大風江上、武陵夢玄子於信夫輕舟過訪、劇

談二宿而別、云々」という文章があり、また卷五十二にも「送於信夫還武陵」の一文がある。
 （6）黒田継高の継嗣は、享保四（一七一九）年十一月のことである。

（澤井）